法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

能楽研究 21巻 ： 奥付

(雑誌名 / Journal or Publication Title)
能楽研究 ： 能楽研究所紀要
(巻 / Volume)
21
(開始ページ / Start Page)
182
(終了ページ / End Page)
182
(発行年 / Year)
1997-07-20

〔編集後記〕

第二十一号は3月刊行予定が大幅に遅れて7月にずれこんでしまった。年度内刊行が不可能なことは早い段階から明らかだったので、事前に予算の繰り延べの処置を採ってはあったが、5月末には刊行できるつもりでいた。その予測をも越えた遅延をまずお詫びする。言い訳はしない。

表の論考は今回が七回目なのにまだ第二章が終わらない。完結までにあと三回は必要なので、専任所員の間には終わりそうもない。退職後も寄稿させてもらわざるを得まい。

竹本氏稿が採り上げた『能本三十五番目録』はすこぶる厄介な資料で、今回竹本氏が試みたような調査を以前に私もやったことがある。まとめなかったので結論の詳細は記憶にないが、竹本氏説とはかなり違っていたように思う。もっと多くの人が発言して然るべき重要な資料のはずである。

山中氏稿は能界展望と並行しての執筆にもかかわらず、最も早く提出されている。格別に面白く見られる宝生流の「延年の舞」が江戸時代後期になっての新たな工夫であることは承知していたが、複雑な経緯を持つその成立過程がこれほど解明可能とは思っていなかった。山中氏の労を多としたい。

平成五年度の研究展望が九年発行の号に載るのは遅きに過ぎるが、遅延回復は容易でない。前号に載せる予定だったのが本号になり、本号の予定だった平成6年度分は次号回しになった。次号には7年度分と一緒に掲載したいものである。

その研究展望を久しぶりに担当して感じたことの一つは、紀要や各大学ごとの研究誌に発表された論考がわずかしか能楽研究所では見られないことである。大学宛の寄贈は図書館なり資料室なりに回って能楽研究所には来ない。抜刷をぜひ研究所に寄贈していただきたいものである。所員への寄贈は後回しにし、研究所への寄贈を優先していただきたい。

その紀要類に目を通し、「紀要」の内容に質的な幅が大きいことにも驚かされた。紀要に発表分は研究業績に数えないことにしている業績調査があるのも、理由がないわけではないようである。表紙に「能楽研究所紀要」なる別称を添えている『能楽研究』も、その別称を除くことを考慮しなければならないのだろうか。

（表　章）

一九九七年七月二十日　発行

能　楽　研　究　第二十一号

102 東京都千代田区富士見二―一七―一
〇三―三二六四―九八一五、三二三四―六七一七
〔FAX〕〇三―三二六四―九六〇七

編集兼発行者　野上記念法政大学能楽研究所
所長　表　章

印刷所　長野市川中島町一八三―一
三和印刷株式会社